The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中国における日本語専攻課程のカリキュラムについて：日本語専攻教学大綱後の新時代のカリキュラムを考える
Author(s)	張，立偉
Citation	大阪大学，2017，博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67061
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　張　立偉　）	
論文題名	中国における日本語専攻課程のカリキュラムについて - 日本語専攻教学大綱後の新時代のカリキュラムを考える -

論文内容の要旨

本論文の主眼は、中国における日本語専攻課程を教育の本来の目的に立ち返りながら、日本語専攻学生にどのような能力を身につけさせるか、また、そのような能力を養成するために、どのような日本語専攻課程のカリキュラム・デザインが望まれるかを検討することだった。

序論では教育とは何かについて論じた。カントによれば人間は教育によって初めて人間となることができるし、また人間は教育が作り上げたものにほかならないと論じている。人間は教育なくして成長できない。また、近藤らは教育の目的はかつても今も新しい世代の育成にあり、彼らの将来にわたる学習能力の発達を手助けするにあると述べている。しかしながら、現在の教育の関心は経済や社会の発展に集中することもある。そのような教育は教育の真の目的からかけ離れていると言わざるを得ない。そこで、本研究では教育を「個々人の発展のために必要なこと」や「個々人の成長の手助けになること」と捉える。

第1章では、中国における日本語教育の変遷と現状について論じた。中国における日本語教育は中国が建国してから現在まで大きな発展を遂げた一方で、その発展の道のりは紆余曲折していた。21世紀の中国における日本語専攻課程は大きな転換期を迎えている。21世紀は世界各地でグローバリゼーションが起こり、国同士の関係がこれまで以上に緊密となり、そのため、外国語学習者に求められるものも異なってきている。このような状況の中で、日本語専攻課程の本質も変化している。これまでの中国における日本語専攻課程は日本語に関する5つの能力に重点を置いて行われてきたが、21世紀の中国における日本語専攻課程は日本語専攻学生に日本語の能力だけではなく、その日本語に関する知識を自分の能力に変える資質や21世紀を生き抜くための力などをも身につけさせなければならない。そのため、これまでの中国における日本語専攻課程を教育の本来の目的に立ち返って見直さなければならない。

第2章ではキー・コンピテンシーと21世紀型スキルについて論じた。21世紀の世界はグローバリゼーションがますます加速し、国と国の関係がこれまで以上に緊密になり、人々は自国の人とだけではなく、外国出身の人々ともコミュニケーションをしなければならない。このような社会を生き抜くために人々に求められる能力はいったいどのようなものかについて現在活発に議論され、数々の提言がなされている。その中でOECDが提唱しているキー・コンピテンシーとATC21Sが提唱している21世紀型スキルの理念が大きな注目を集めている。それらの枠組みでは21世紀という社会を生き抜くために人々に求められる能力をリストアップしている。第1章ですでに述べたように、21世紀の中国における日本語専攻課程は改革を行わければならない。その際にキー・コンピテンシーや21世紀型スキルなどが重要な参考になる。

第3章から第5章までは中国における日本語専攻課程の現状調査である。

まず、第3章では現在の日本語専攻課程で日本語を学習している日本語専攻学生に何が起こっているかを動機づけの観点から考察を行った。専攻学生の動機づけを調査するために、中国のA大学に在籍する専攻学生を対象にアンケート調査を予備調査と本調査に分けて実施した。専攻学生は日本の文化や日本社会などに興味を持って日本語学習をはじめたといったような統合的動機づけを持っている一方で、将来、日本語を使用して仕事をしたいや留学をしたいといった道具的動機づけも持ち合わせていることがアンケート調査を通して明らかになった。しかしながら、その一方で、言語学習において重要であると思われる「第二言語学習に関する自信」と「学習努力」が学年が上がるにつれて低下する傾向が見られた。その原因はさまざまであるが、現在の日本語専攻課程のカリキュラムも専攻学生の動機づけに影響を及ぼしていることが示された。

第4章では現在の中国の日本語専攻課程のカリキュラムの現状について論じた。日本語専攻課程のカリキュラムの現状を明らかにするために、カリキュラムの設定の基準となっている各大学の日本語指導要領がどのようになっているかを調査した。そのために中国で日本語専攻を設置している大学の中で9校の大学を選出し、「985工程」、

「211工程」と「一般大学」との3つのグループに分け、それぞれのグループの日本語指導要領の現状を明らかにした上で、全体の傾向をまとめた。その結果、現在の日本語専攻課程の日本語指導要領は日本語に関する5つの能力の養成に重点を置き、さまざまな仕事に従事できるような実利型専攻教育に傾いていることが明らかになった。しかしながら、第1章で述べたように、21世紀の中国の日本語専攻課程は日本語専攻学生に日本語能力だけではなく、さまざまな状況に対応できる力や学んだ知識を自分の能力に変える力などをも養わなければならない。日本語専攻課程はこれまでよりも広い視野の下に構想されなければならないことが示唆された。

第5章では日本語専攻課程の当事者である日本語専攻学生と教員に、現在の日本語指導要領の下に組まれた日本語専攻課程のカリキュラムについてどのように認識しているかについてインタビュー調査を行った。その結果、日本語専攻学生も教員も現在の日本語専攻課程のカリキュラムに疑問を呈していることが確認できた。具体的には学習目標の提示、評価システムと実践である。まず、学習目標の提示について、日本語専攻学生は自分の日本語能力がどのレベルに達しているかを学習目標として提示してほしいのに対して、教員は試験内容を中心に学習目標を提示しているところにズレが生じている。次に、評価システムについては、日本語専攻学生は試験だけではなく、もっと客観的に日本語専攻学生の日本語能力を測れるようなシステムを望んでいるのに対し、日本語専攻学生の意見に同意する教員もいれば、現在の試験で十分であると認識している教員もいた。評価システムに関して、日本語専攻学生と教員の間と教員同士の間にも意識のズレが生じている。さらに、専攻学生が現在の専攻課程のカリキュラムの中には自分が学んだ日本語の知識を実践する場がないと認識しているのに、教員もそれに同意している。最後に、現在の日本語専攻課程で使用されている日本語教材には一貫したものがなく、教材が変わるたびに、日本語専攻学生はその変化に戸惑いを感じていた。一方で、自分の大学の日本語専攻課程に合うような日本語教材はなかなかないと教員は認識していた。これらの問題は現在の日本語指導要領が日本語能力の養成にも重点を置いていることに関係していると考えられる。日本語専攻課程を改革するためには、日本語専攻課程の指導要領の再策定から出発する必要があることが示唆された。

第3章から第5までは現在の中国の日本語専攻課程の現状調査について述べた。現在の中国の日本語専攻課程にはさまざまな課題があることが確認できた。それらの課題をどのように解決すればいいのかについて第6章から第8にかけて論じた。

第6章では日本語専攻を設置している各大学が日本語指導要領を作成する際に参考にしている日本語専攻教育新教学大綱について論じた。各大学が日本語指導要領を作成する際に、日本語専攻教育大綱というものに従わなければならない。これまでの日本語専攻課程は日本語専攻旧教学大綱に従って行われてきた。2015年に、新教学大綱が検討され始め、これからの日本語専攻課程はこの新教学大綱を参考に改革を行っていくことが予想される。そこで、新教学大綱は旧教学大綱に比べて、どのような変化を遂げているかについて第6章で検討した。これまでは日本語専攻課程では日本語に関する5つの能力に重点が置かれていたのに対して、新教学大綱では日本語専攻学生に日本語能力だけではなく、さまざまな課題に対応できる力や学んだ知識を実践できる力などを持つ人材養成の目標へとシフトしている。つまり「日本語+X」という教育理念である。旧教学大綱は実利型日本語専攻教育を重視しているのに対して、新教学大綱は教養型日本語専攻教育を重視していると見られる。また、新教学大綱は具体的な教育内容が旧教学大綱を参考にしつつ、専攻学生に養成するべき能力を7つ挙げている。この7つの能力は「X」の部分を反映していると言えるだろう。また、この7つの能力は第2章で論じたキー・コンピテンシーや21世紀型スキルなどの理念と、新教学大綱では言及されていないが、極めて類似していることも確認できた。このような日本語能力以外の能力の養成もこれからの日本語専攻課程の重要な目標となってくるだろう。

第7章では新教学大綱が提唱している7つの能力をも含めたキー・コンピテンシーや21世紀型スキルの獲得について論じた。第7章ではキー・コンピテンシーや21世紀型スキルなどの理念に関係する『めやす』やTuning Projectなどについて検討した。また、これらの理念を実践した例として、愛知教育大学が実施している学生にキー・コンピテンシーを育成するためのプロジェクト、奈良教育大学が行っている学校教育教員養成課程カリキュラム・フレームワークへの取り組みと中国の大連市における第二外国語としての日本語教育におけるさまざまな改革について論じた。これらの理念や事例を参考に、中国の日本語専攻課程のカリキュラム改革の提案を第8章で試みた。

第8章では中国の日本語専攻課程のカリキュラム改革への提案を試みた。21世紀の中国の日本語専攻課程の改革においては「日本語+X」が重要なキーワードとなってくるであろう。この中の「X」は日本語専攻以外の専門知識を指している。そうした内容を検討する際に、キー・コンピテンシーや21世紀型スキルは重要な資料となる。第8章ではまず、キー・コンピテンシーや21世紀型スキルを考える際に常に念頭に置かなければならない「人生への思慮深さ」や「考える力（反省性）」について再論し、この2つを踏まえた上で、21世紀の中国の日本語専攻課程の

カリキュラム改革への提案を、日本語専攻課程の目標を再考すること、キー・コンピテンシーや21世紀型スキルなどを踏まえて構想すること、そして評価システムを再構築することの3つの角度から行ってみた。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　張　立偉　）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	教授	西口光一
	副 査	教授	山本佳樹
	副 査	教授	岩根　久

論文審査の結果の要旨

21世紀を迎えてグローバリゼーションはますます進行し、中国の大学における日本語専攻課程も大きな転換点を迎えている。本論文は、中国の大学の日本語専攻課程のカリキュラムをテーマとして、改めて教育とは何かを振り返った上で（第１章）、キー・コンピテンシーや21世紀型スキルの枠組みを展望的な視点として提示している。そして、同専攻学生の動機づけの側面（第３章）、カリキュラムの現状（第４章）、専攻学生と専攻修了学生及び専攻の教員へのインタビュー調査（第５章）によって、日本語専攻課程の現状を複数の側面から巧みにあぶり出している。次に、2015年に提案された日本語専攻新教学大綱と旧教学大綱を対照して考察し、新教学体系の理念や教育目標がキー・コンピテンシーや21世紀型スキルの理念等と類似していることを明らかにし（第６章）、その一方でキー・コンピテンシー等の枠組みを取り入れた先行の教育開発の事例を検討した（第７章）。以上のような、21世紀の教育改革動向の展望と日本語専攻課程の現状把握と新教学大綱の解釈及び先行の教育開発の知見を踏まえながら、今後進展するであろう新教学大綱後の中国の大学における日本語専攻課程のカリキュラム改革にあたっての重要な観点や指針を提案している（第８章）。

本論文は、多角的にアプローチしている分、個々の部分の議論については掘り下げが足りない部分が見られる。例えば、キー・コンピテンシー等についての批判的検討がなされていない。また、インタビュー調査では教員の見解などはもっと掘り下げたほうが重要な示唆が得られただろう。そのような点は指摘できるが、本論文は包括的な観点から日本語専攻課程のカリキュラム改革に重要な知見と示唆を与えることに成功している。以上のような判断で、本論文を博士（言語文化学）の学位論文として価値のあるものと認める。

なお、チェックツール“iThenticate”を使用し、剽窃、引用漏れ、二重投稿等のチェックを終えていることを申し添える。